

水産総合研究センター受託研究に関する調査

三宅島探訪資料の来歴・概要調査報告

越智 信也

2014年度も引き続き国立研究開発法人水産総合研究センターの公募事業「水産総合研究センター所蔵古文書整理委託」の受託により、同センター所蔵古文書整理・目録作成を進めた。今年度は東京都三宅島の二つの資料群「坪田村役場文書」「坪田村漁業組合文書」および神奈川県秦野市の「今井八郎家文書」の目録と解題の原稿を作成する作業を中心とし、同時にデジタルカメラによる写真撮影、粗目録の作成を行った。

2015年2月9日、田上繁（日本常民文化研究所所長）、織田洋行（古文書整理業務担当者）、岩田康志（古文書整理業務担当者）、越智信也（常民研職員）の4名による三宅島調査を実施した。

三宅島は、2000年に大規模な雄山の噴火とその後の全島民避難を経験した。2005年に解除され



写真1 三宅島全景

たが、避難した島民の3割以上が島への帰還を選択しなかった。今回の調査で、島の方々から、噴火後の生活や産業の変化に対応する苦難について伺うことができた。帰島後10年を経てもなお、その傷跡は癒されていないという感想をもった。

今回の調査で、三宅島村教育委員会の飛永俊一郎氏のはからいで、坪田地区の古い歴史や、かつては盛んだった天草漁の様子に詳しい3名の島の方々からお話を伺うことができた。三宅島の坪田地区は、古くから良質の天草が採れることで有名であった。昭和30～40年代の最盛期は、夏の漁期になると、他県や遠く韓国からも人が集まって漁が行われ、天草採取で財をなし、いわゆる「天草御殿」が建つほどであった。天草漁は漁業組合と旧坪田村との間でかわされた賃貸借契約により、漁の管理は役場が直接行っていた。採取の方法は原則として、海女による潜水漁で、「ぎり舟」と呼ばれる伝馬船が用いられていた。その他、トビ魚やカツオ漁も行われ、往時は漁業による収入が多くを占めていた。今回お話を伺うことができた田中勘一氏は、かつて坪田村役場に役人として努められ、その間に撮影した膨大な写真を六つ切から四つ切ほどにプリントして保管しておられた。それらは坪田地区の天草漁や生活の諸相を生き生きと映し出しており、天草漁の往時を伝える数少ない一級の資料と言えよう。それらの写真の一部は教育委員会に寄贈されたが、教育委員会側の保存体制については、飛永氏や教育委員会社会教育課長の島村幸明氏も今後の課題と指摘しておられた。

三宅島はかつて神着（かみつぎ）・伊豆（いず）・伊ヶ谷（いがや）・阿古（あこ）・坪田（つばた）の5村に分かれていたが、現在は三宅村の1村になっており、阿古に村役場がある。三宅島郷土資料館は、かつての阿古小学校を改修して設置された。教育委員会の島村氏が、あらためて島の基本資料を収集整理することの必要を熱心に語っておられ、印象的であった。今後、新たな資料収集の事業が進められ、郷土資料館に収積されることで、島の歴史や生活文化に関する島民の理解や興味がますます深まっていくのではないかと期待をいだかせるお話しであった。



写真2 撮影した写真について語る田中氏



写真3 坪田村付近



写真4 江戸時代の三宅島役所跡